

変わりつつある街を舞台に、「まちのファン」を増やすため、広場空間の提案をした。
様々な人々と関わり合いながら、必要とされる空間と表現したい空間デザインの擦り合わせに、四苦八苦した。
その上で、理想とする空間を完遂し、多くの人に使われるリアルな空間を作り上げた。

1. プロジェクトメンバー

新潟工科大学

新潟工科大学は企業がつくったものづくり大学で、企業との関わりが深く、企業との連携による実践的な学びができる。正課外活動として「空間デザイン実践」「ハコニワファニチャーワークショップ」などさまざまなプロジェクトを企業と共に実施している。

燕宮町

宮町で昔からお店を構える地元の商店やものづくり企業、空き店舗に新規出店するカメラマンやデザイナーといった若いオーナーなど、宮町を盛り上げようとする人の多い町

つばめいと

燕市内には金属加工を中心とする中小規模の製造業が多くある。それらの企業が連携し、インターンシップを通じて地元の中小企業と全国の学生をつなぐ事業を実施している。

2. 燕宮町の現状

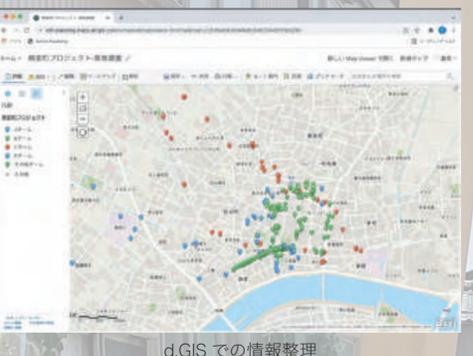
新潟県燕市は、他の地方と同様衰退が進み、居住者が減り、シャッター通りとなっている。燕市宮町では、そのような空き店舗に若いオーナーが新規出店するなど、宮町を盛り上げようとする人が集まってきている。つばめいととは宮町再生への取り組みとして、近隣空き地にシェアオフィスの建設や、空き物件の買い取りを進めるようになった。また、つばめいとと地元関係者が連携し、複数のまちづくり事業を始めることになるなど、宮町は再生に向けた意欲のある町である。



a. 燕宮町の様子

3. 2021年度の取り組み

(1) 現地調査・まちあるき



d. GISでの情報整理

5月7日、8日に現地で第1回ワークショップを開催。32名の学生が参加した。
4グループに分かれて、現地や周辺地域の調査を行った。
1日目は、地域の宝探しを行った。
まちのさまざまな写真を撮影し効率的にストックするために地図上にピンを立てて写真やコメントを格納することができるGIS(地理情報システム)を活用した。
グループごとでまとめ、発表、共有を行った。
2日目は、地域の情報をさらに掘り下げるために、宮町開発計画会議関係者へのヒアリングを実施。
2日間の現地調査を受けて、燕宮町の現状をまとめ、未来の燕宮町について検討した。

(2) ワークショップ

6月25日～26日、8月6日に第2回、第3回ワークショップを開催した。
第2回目のワークショップでスクエア隣接の空き地に作る仮設のイベント広場の空間の活用提案をグループごとに考え、発表した。
第3回目のワークショップでは、その提案を具体的な空間に落とし込み図面や模型、3DCG等を作り、提案を練った。最後に、宮町開発計画会議関係者の前で成果を発表した。



e. ワークショップの様子1



f. Aグループの提案



g. Bグループの提案



h. ワークショップの様子2



i. Cグループの提案



j. Dグループの提案

Aグループ 樹状オープンスペース
最高高さが7mの樹状の列柱を作り、その下に誰でも使える大テーブルと椅子を設置する
Bグループ 広場には境界が必要!?
細長い敷地の両端にゲートとなる屋根付きの小上がり空間を作り、通りの人を誘引する
Cグループ 防災空地
防災空地として活用し、コンテナを改造したオリジナル防災倉庫を設置し、常時利用し防災力を高める
Dグループ パビリオンをつくらう
柱とレベル差のある床を持つ仮設のパビリオン空間を作り、テーブルや椅子で休憩等ができる空間を作る

8月31日に開催された定例の宮町開発計画会議で第3回目のワークショップの成果を協議し、Dグループの「パビリオンをつくらう」が採用された。

(3) 施行・竣工

施工を担当する株式会社丸山組とDグループの学生で打ち合わせを実施。
施工性とコストの面から柱や梁、貫を鋼製の単管で構成し、床面には構造用合板を使用することとした。



Dグループの学生が具体的に柱となる単管の高さや床面の高さ、通路部分の幅・高さ等の検討をした。模型と3DCGで検討しその結果から図面を作成した。



10月11日(月)に着工し、単管の設置を開始した。
10月14日(木)に、学生2名が細部の確認と施工の手伝いに現場を訪れ、柱上部と貫の接合部を補強する頬杖部材を設置した



1週間の施工期間を経て、10月15日(金)に仮設イベント広場が完成した。



4. 2022年の取り組み

4-1. 改修・ゼロイチマルシェ

(1) 打ち合わせ・提案

竣工後に、宮町の方から
・床材としていた合板が雨等で濡れると滑りやすくなる。
・地面が砂利であるため、落ちると危ない。
・単管がデザイン的に微妙。
・どう扱っていいかわからない。使い方がわからない。
という4つが課題として挙がった。



k. 学生の提案1 l. 学生の提案2



m. 学生の提案3 n. 学生の提案

それを受けて、2021年度の取り組みに参加していた12名の学生と宮町の方とで打ち合わせを重ね、安全で魅力的な空間になるようにブラッシュアップした。その後開催された定例の宮町開発計画会議でブラッシュアップした案を発表し、宮町の方の承認を得た。費用面の検討も行い、実際に改修作業を行うための準備を進めた。

(2) 改修作業

6月24日、25日、7月1日、8日に現地に学生が向かい、改修作業を行った。



o. 作業する学生の様子1 p. 作業する学生の様子2



q. 改修後のパビリオン1 r. 改修後のパビリオン2

パビリオン空間の最終的な活用目的をマルシェの開催とし、賑わいの場へと変えることを目標にした。
改修項目は主に3項目。
・アプローチ空間の作成
・ファニチャーの製作と設置
・日射を遮る屋根の設置
滞留空間として、居心地の良さを向上させる改修となった。
飛び石の敷設や合板を加工したファニチャー作製、帆布生地屋根設置等、学生DIYでも空間作りが出来ることを学んだ。

(3) ゼロイチマルシェ

7月10日にゼロイチマルシェが開催された。



s. ゼロイチマルシェの様子 t. ゼロイチマルシェの様子

パビリオンを中心としたマルシェが開催された。このマルシェでは、「新しいこと」に挑戦する人を応援するプロジェクト。コーヒーや古着・本の販売のお店が出店。初めての出店を通して多くの人が集まった。

(4) 改修・ゼロイチマルシェを通して

現地作業をしていく中で、変化していくパビリオンに、地域住民の興味関心が増えていくのを感じた。



u. 変化したパビリオン

4-2. 本整備に向けた調査・提案

来年度には現在の空地の状態から広場の本整備が行われる。本整備を行うことでイベントを実施しやすくなり、イベントがないときも利用しやすくなる。そこで2021年度に整備した「仮設広場」の「本整備」に向けた計画づくりに取り組む。2021年度と同様に現地でワークショップを開催し、周辺のまちあるき、地元関係者との対話、事例調査等を実施し、本整備に向けた計画案を作成する。

5. 2023年度以降

広場の本整備、老朽建築の建て替えが予定されている。広場の利活用や、街路のあり方などにも学生が関わり、提案していきたい。

6. 学べたこと

実際にまちに出て、リアルに考え、それが実際に施工されて、多くの人に使ってもらおうというなかなかできない良い経験になった。



資金面や作業日程の調整などの課題が出てきた。このような課題についても考えることができてよかった。

まちを元気にしたいと意欲的な人がいるということが分かり、「まちづくり」への親近感が湧いた。まちづくりをしているのは建築の人だけではなく、色々な分野の人がいることが分かった。



大学の講義室では、学ぶことのできない良い経験になったと感じる学生

まちづくりに対して親近感が湧いたり、新たに興味を持った学生

代表者名：鈴木里佳
lingmulijia136@gmail.com